

信濃町の埋蔵文化財

平成17年度町内遺跡発掘調査報告書
—狐久保遺跡ほか—

2006

長野県

信濃町教育委員会

平成17年度町内遺跡発掘調査報告書
—狐久保遺跡ほか—

2006

長野県

信濃町教育委員会

例 言

1. 本書は平成17年度に実施した長野県上水内郡信濃町における開発事業に伴う発掘調査、試掘調査の報告書である。
2. 調査は国からの補助金交付を受けて信濃町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆、編集は調査担当者である渡辺哲也がおこなった。編集の補佐を藤田桂子がおこなった。
4. 本調査の遺物、実測図、写真等の資料はすべて信濃町教育委員会に保管されている。
出土資料の記号番号は狐久保遺跡 [05KT] である。
5. 調査体制は次のとおりである。
調査主体者 信濃町教育委員会
事務局 教育長 小林豊雄
生涯学習課長 櫻井博一
生涯学習係長 伊藤 均
調査担当者 生涯学習係 渡辺哲也
発掘参加者
(狐久保遺跡) 小日向千代子 小林八重子 佐藤孝治 篠崎和美 高田昭夫 高遠三治 高橋是清
深澤政雄 藤田桂子
(野田屋ホテル跡地) 大沢正志 佐藤孝治 篠崎和美 高田昭夫 高遠三治 田村勇 徳永門 東賢
深澤政雄 藤田桂子 山崎啓一 若月あや子
整理参加者
篠崎和美 藤田桂子
6. 野田屋ホテル跡地の調査では、野尻湖発掘調査団の広域の地質調査の一環で発掘現場の地層を検討していた
だき、その内容について野尻湖地質グループから原稿を賜った。野尻湖発掘調査団及び野尻湖地質グループ
に感謝申し上げる次第である。
7. 調査をおこなうにあたり、事業主の柴田薫氏（狐久保遺跡）、石田工務店株式会社（野田屋ホテル跡地）に
は多人なるご協力をいただいた。また、トレスホームズ株式会社には調査を進める上で便宜を図っていただ
いた。記してお礼を申し上げますの次第である。

目 次

I 信濃町の環境と遺跡	1
1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	1
II 調査の内容及び成果	2
1. 狐久保遺跡（2005個人住宅地点）	2
2. 野田屋ホテル跡地	6
付編 野田屋ホテル跡地試掘調査地点の地質	8
写真図版	13

I 信濃町の環境と遺跡

1. 自然的環境

信濃町は長野県の北端に位置し、新潟県妙高市と原境を接している。町域は東西の方向に概ね3つの地形に分けられる。東部は第三紀鮮新世から第四紀前期更新世の堆積岩を主体とする基盤山地が占め、それらの上を瓦尾山起源の安山岩溶岩が覆っている。野尻湖はこの基盤山地の中にあり、およそ7万年前にその原形ができたといわれている。西部には第四紀中・後期更新世の飯綱山、黒姫山の火山地形が占めている。この東西の山地に挟まれた中央部に低地帯があり、主に後期更新世から完新世の湖沼・河川堆積物からなる丘陵、段丘、低湿地などになっている。

野尻湖を水源とする池尻川は関川水系に属し、北方へと流下する。一方長野市戸隠を水源とする鳥居川は千曲川（信濃川）水系に属し、南東方向に流下する。この二つの水系の分水嶺は柏原地区に位置し、その辺りはなだらかな高原状の地形となっている。こうした平坦な地形は内陸部と日本海側とをつなぐルートとして古くから利用されてきたものと考えられる。

現在人々が暮らす居住域は、標高700m前後の地域で、気候は日本海側の気候に属し、冬期は寒冷で多雪、夏期は比較的冷涼で避暑地として利用されている。

2. 歴史的環境

信濃町は前述のような地形の特徴により、日本海側と内陸部をつなぐ交通の要所にあるため、古くから人々の往来がさかんであったことが推測できる。野尻湖の西側の湖底に広がる立か鼻遺跡はおよそ4万年前の狩猟・解

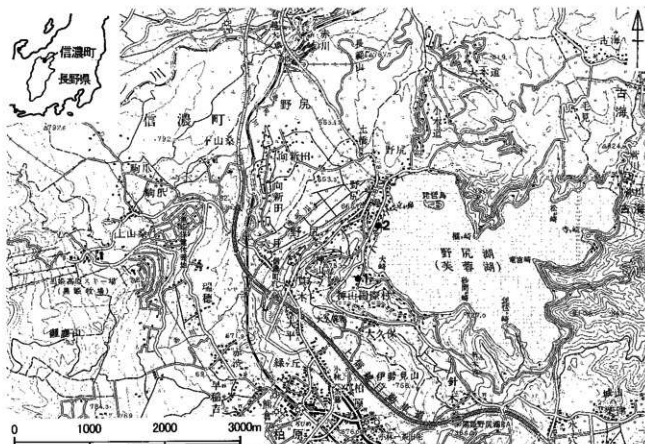


図1 調査地の位置

(国土地理院平成10年5月1日発行1/50,000「戸隠」平成13年4月1日発行1/50,000「妙高山」地形図を使用)

1. 狐久保遺跡
2. 野田屋ホテル跡地

体場遺跡(キルサイト)と考えられており、ここがゾウの通り道であったことがうかがえる。国内有数の後期旧石器時代の遺跡が集中する地域であることから、遊動する旧石器人にとって交通の要所であったことは明白である。古代の東山道支道が通っていたと推定され、また、江戸時代には北国街道が整備された。また、関川を境として信濃と越後の国境があり、その歴史的な地理的条件を有する地域でもある。中世の山城が多く存在したことも、交通の要所として争奪戦がおこなわれた地であることを物語っている。

信濃町には現在までに173ヶ所の遺跡が知られているが、時代により遺跡数の変遷にその特徴が見出せる。その特徴を列記すれば、1)旧石器時代の遺跡が集中する。2)縄文時代では草創期、早期、前期の遺跡は複数存在するが、縄文時代中期以降の遺跡は少なくなる。3)縄文時代中期以降、弥生時代、古墳時代の遺跡はわずかで、平安時代になると遺跡数が急増する。今回の狐久保遺跡では縄文時代晩期前半の遺物が出土したが、これまでにあまり出土例がないため、貴重な調査例である。

II 調査の内容及び成果

1. 狐久保遺跡 (2005個人住宅地点)

A. 調査に至る経緯と調査の経過

狐久保遺跡は野尻湖の西岸でもっとも西へ張り出した先に位置し、北北東へ緩やかに下る斜面に立地する(図1、図2)。県道の建設のために1967年に緊急調査がおこなわれ(小林, 1968)、縄文時代草創期の隆起線文土器が出土した地点は今回の対象地の北西側で、一段高い地形面になる。今回の調査地周辺の現状は山林となっており、その中に別荘の建物が点在する状況で、調査地自体は茅などが生える原野となっていた。

ここに個人住宅の建設が計画されたため、平成17年4月に埋蔵文化財の保護について照会があった。この周辺での調査例がなく、遺跡の分布状況を把握していなかったため、試掘調査を実施することにした。平成17年4月26日に試掘調査をおこなったところ、縄文土器及び陶磁器類が出土したため、現場の代理人に状況を確認してもらい、協議の結果5月の連休後に本調査を実施することになった。本調査は5月9日から実施した。

B. 調査の方法

試掘調査は平成17年4月26日に実施した。建物の基礎工事予定地の四隅に1.5m×0.8mの試掘トレンチ(テストピット)を設定して、表土から手掘りによっておこなった。遺物が出土したため、本調査が必要との判断をし、遺物の記録をとり、遺物を取り上げたのち埋め戻しをおこなった。

本調査は平成17年5月9日から11日までおこなった。基礎工事の外周部分を対象とし、0.8mの幅でトレンチを設定した。表土を含めて手掘りにより基礎工事で掘削を予定している約50cmの深さまでを発掘した。

C. 調査の結果

a. 層序(図3)

調査前の調査地は茅や笹が一面に生えている状況であった。表土は薄く、厚さ10cm以内であったが、植物の根を多く含んでいる(I層)。II層は風成の黒色の火山灰層(柏原黒色火山灰層)で、20cm~30cmの厚さがあり、陶磁器類と少量の縄文土器を包含する。

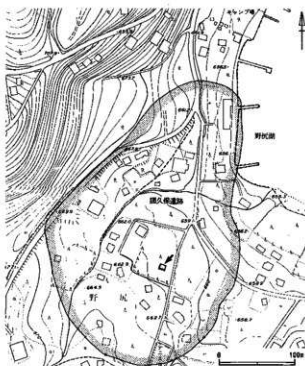


図2 狐久保遺跡の範囲と調査地の位置

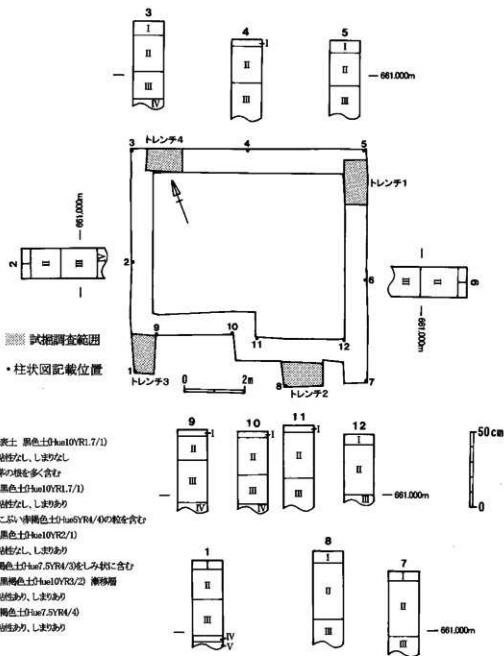


図3 狐久保遺跡の調査範囲と土層

III層はII層の黒色土に褐色土をシミ状に含んでおり、多くの縄文土器を包含している。IV層は上位の黒色土と下位のV層の褐色土に挟まれ、その漸移的な色を呈している。IV層、V層から遺物は出土しなかった。

b. 遺構と遺物の分布

遺物が多く分布するIII層を中心に調べたが、遺構は検出できなかった。遺物の分布を図4に示したが、遺物は東のコーナー付近に集中しており、このあたりからさらに東に遺跡が広がっていると思われる。陶磁器類の分布は南側にまとまりがみられた。遺物はそのほとんどが小破片であり、器形が復元できる資料は得られなかった。

c. 遺物 (図5、表1)

出土遺物の総数は178点で、内訳は縄文土器98点、石器1点、土師器5点、陶器5点、磁器12点、鉄製品1点、鏝56点であった。概ね縄文土器はIII層、陶磁器類はII層から出土したが、両者のレベル差は大きくなく、一部混在して出土した。遺物は小破片が多く、図化できるものは少数で、23点に留まった。また、器形が復元できる資

料は得られず、器種が特定できるものも少なかった。

1、2は口縁部で、平行沈線と縄文が施文されている。3～7は胴部に沈線と縄文が施文されている。8、9は沈線が施され、10、11は沈線と刺突列点文が施されている。12～19は縄文が施文されているもの、21～23は無文土器の口縁部である。これらの資料の施文の構成から、時期は縄文時代晩期前半と位置づけたい。

陶磁器類は写真で示したが、染付などから近世のものと思われる。

D. まとめ

信濃町の遺跡分布の特徴として、縄文時代中期以降の遺跡が少ないことが挙げられていた。しかし、昨年度の調査でも杉久保遺跡で縄文時代晩期の遺物が出土するなど（渡辺，2005）、わずかではあるが資料の増加が見られる。湖畔に面した杉久保遺跡と狐久保遺跡で時期的に近い遺物が出土していることは、この時代の遺跡の立地

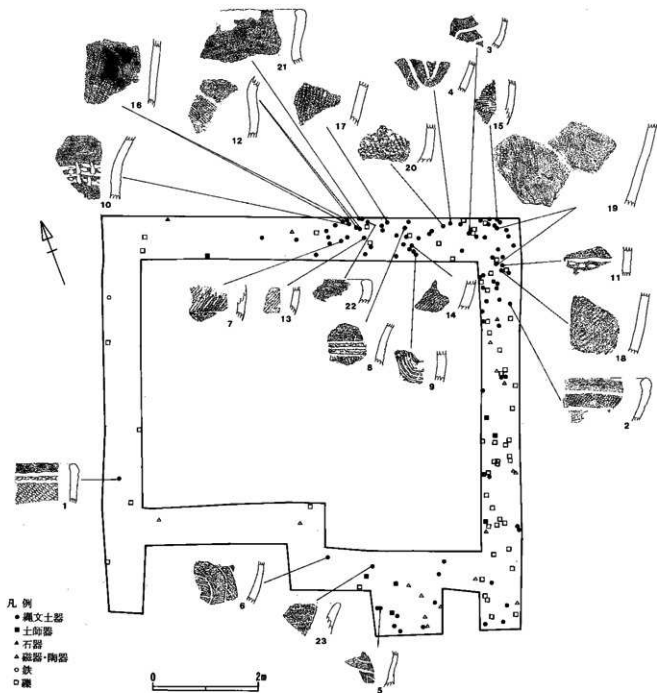


図4 狐久保遺跡の遺物の分布

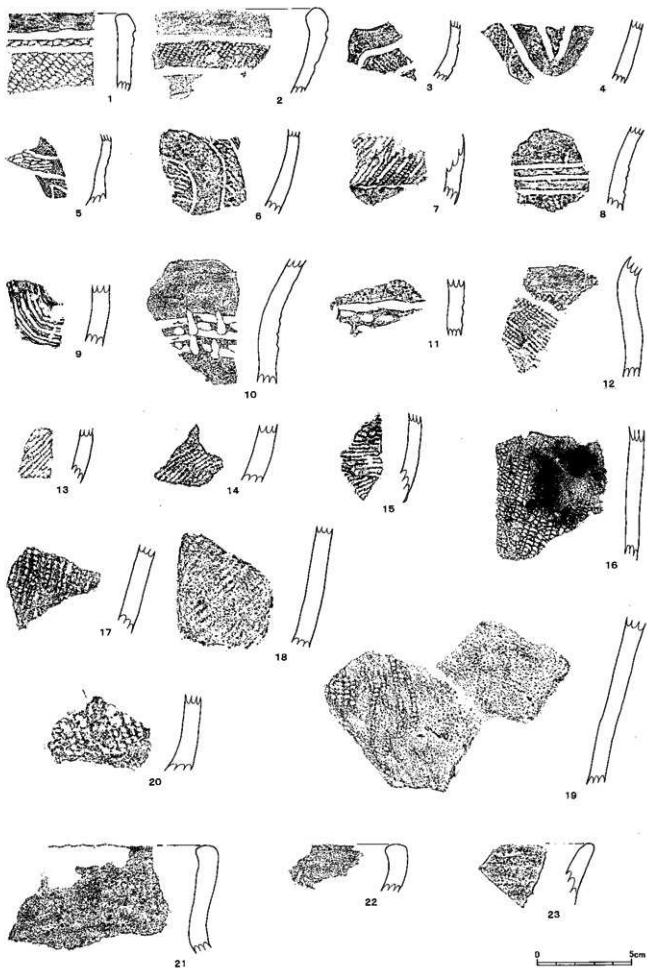


図5 狐久保遺跡の主な出土遺物

表1 狐久保遺跡の主な出土遺物一覧

図番号	遺物番号	層位	部位	文様	炭化物	調整	含有物	組織	観察(内面)	観察(外面)	備考
1	102	II	口縁	平行沈線 単節 LR	—	外: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
2	22	III	口縁	平行沈線 単節 LR	外○	外: ミガキ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	褐色	暗褐色	
3	164	III	胴	沈線 縄文 単節 RL	内○	外: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	黒褐色	褐色	
4	168	III	胴	沈線 縄文 単節 LR	外○	外: ナデ 内: ナデ	qt・白・赤・小レキ	×	褐色	褐色	
5	40	III	胴	沈線 縄文 単節 LR	外○	外: ナデ 内: ミガキ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	褐色	
6	36	III	胴	沈線 縄文 単節 RL	外○	外: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	黒褐色	褐色	
7	88	II	胴	沈線 縄文 単節 LR	内○	外: ナデ	qt・白・小レキ	×	赤黒色	明赤褐色	
8	172	III	胴	沈線	—	外: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	にぶい褐色	
9	80	II	胴	沈線	外○	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	にぶい黄褐色	
10	143	III	胴	沈線	—	外: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	褐色	褐色	
11	16	III	胴	沈線	—	外: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	にぶい褐色	
12	140・175	III	胴	無文 縄文 単節 LR	外○	外: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	黒褐色	黒褐色	85と同一層位
13	85	II	胴	縄文 単節 LR	—	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい黄褐色	灰黄褐色	140・175と同一層位
14	133	III	胴	縄文 単節 LR	—	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい黄褐色	褐色	
15	176	III	胴	縄文 単節 LR	—	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	にぶい赤褐色	
16	89・90	II	胴	縄文 単節 LR	外○	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	○	明赤褐色	褐色	
17	173	III	胴	縄文	外○	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	黒褐色	
18	17	III	胴	縄文 単節 LR	外○	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	黒色	褐色	
19	15・160	III	胴	縄文 単節 RL	—	内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	○	褐色	明褐色	
20	169	II	胴	縄文 単節 RL	—	内: ナデ	qt・白・赤・小レキ	○	にぶい赤褐色	明赤褐色	
21	142	III	口縁	無文	—	口唇: ミガキ 肩: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	黒褐色	
22	139	III	口縁	無文	—	口唇: ミガキ 肩: ナデ 内: ナデ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい褐色	にぶい褐色	
23	37	II	口縁	無文	—	外: ミガキ 内: ミガキ	qt・ho・白・赤・小レキ	×	にぶい赤褐色	褐色	

qt:石英, ho:角閃石, 白:白色岩片, 赤:赤色岩片, 小レキ:小さな塵を表す

に示唆を与えているように思われる。野尻湖畔に同時期の遺跡が今後増加すれば、さらに考察が深められるであろう。

2. 野田屋ホテル跡地

A. 調査に至る経緯と調査の経過

野尻湖の西岸は岸に沿って旅館やホテルが建ち並んでいるが、その中でもっとも南側にあった野田屋ホテルが解体され、その跡地に民間の福祉施設が計画された(図1)。平成17年5月に事業主の石田工務店株式会社から開発地と遺跡の関係について照会があり、以下のような内容で協議をした。この地点は遺跡の範囲には入っていないものの、ナウマンゾウの発掘で知られる立が鼻遺跡と、海端遺跡に隣接しており(図6)、近くの湖底面ではナウマンゾウの臼歯化石が採取されたり、足跡状のくぼみが確認されている。そのため、ナウマンゾウの化石の分布域、または遺跡の範囲が開発地にまで広がっている可能性があるため、状況を把握するために試掘調査をさせてもらいたい旨を伝えたところ、協力を得ることができたため、調査を実施することになった。開発地にはかつての湖底でたまった地層が分布していることが予想され、地層を調査するにはこの地域の複雑な湖底の地質について長年の研究の蓄積がある野尻湖地質グループの協力をおおぐことにした。野尻湖発掘調査団による野尻湖周辺における広域地質調査の計画が8月にあるということであったため、それにあわせて調査日程を組み、発掘したあとの地層の検討をおこなってもらうことにした。調査は平成17年8月8日から12日まで信濃町の発掘作業員による発掘をおこない、野尻湖発掘調査団の地質調査参加者には8月11日から14日にかけて地層の検討をおこなっていただいた。その後測量等をおこなった後、8月19日に重機で埋め戻しをおこなった。



図6 野尻湖ホテル跡地の調査地の位置

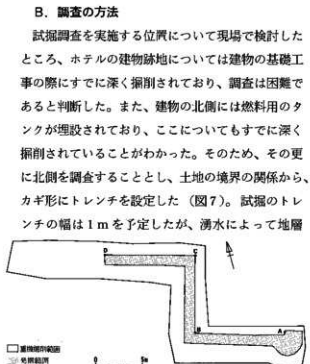


図7 野尻湖ホテル跡地の調査範囲

(アルファベットは壁面図に対応する)

が崩れることが予想されたため、重機によりおよそ4m幅で埋め上等を掘削した後、1m幅のトレンチを手掘りにより掘り下げた(図7)。重機で掘削したのは表土から1m前後の深さである。調査地全体で、地表から1~0.5mの深さでコンクリート片やこぶし大の礫を含む埋め土が認められた。その下には暗褐色土が厚いところで50cm程度あり、これが埋め立てがおこなわれる前の表土、または水田の耕作土と考えられる。これらを重機で取り除いた後、湖底にたまった砂礫や砂の層を手掘りにより1.5m前後掘り下げた。その地質的な記載については別記の付編を参照されたい。

C. 調査結果とまとめ

調査の結果、化石や遺物は出土しなかった。そのため、この地点は遺跡の範囲外という従来の見解の変更はない。今回の調査地において野尻湖発掘調査団によってくわしい観察がなされ、野尻湖地質グループによって詳細な記録を残すことができたことは、野尻湖の発掘地である立が鼻遺跡の今後の研究にも寄与するものと考えられ、意義深い調査であったと思われる。

文献

小林亨, 1968, 長野県上水内郡信濃町狐久保遺跡緊急発掘調査概報, 信濃町誌, 77-91.

渡辺哲也, 2005, 平成16年度町内遺跡発掘調査報告書一杉久保遺跡ほか一, 信濃町教育委員会, 12p.

*野尻湖地質グループ

調査地点は野尻湖西岸、標高659mの湖岸段丘上に位置し、立が鼻遺跡からの距離は西南西へ約100mである。調査では湖岸線と直角方向に西から約9.5mと約11mの合計約20.5m、並行方向に約8mのカギ形のトレンチを深度約4m掘削し、その壁面を観察した。

1. 地質層序

調査地周辺の地質に関しては1962年より野尻湖発掘調査団によって詳細に調査されており、本地域周辺に分布する調査対象の地層は、下位より登程島沖層および野尻湖層と命名されている。このうち野尻湖層は多数の降下テフラを挟む砂～シルトよりなり、地層の岩相と層序関係に基づいて、下位より貫ノ木シルト部層、海端砂シルト部層、立が鼻砂部層および芙蓉湖砂シルト部層の4部層に区分される(図8; 野尻湖地質グループ, 2004)。

2. 調査地点に分布する地層と堆積年代

調査地点のトレンチで観察できる地層は不整合により3層に区分できる。これらを下位よりI・II・III層とした(図9)。I層は紫灰色シルトと礫混じり灰色細粒～極粗粒砂からなる。本層は西から東に向かって平均30度

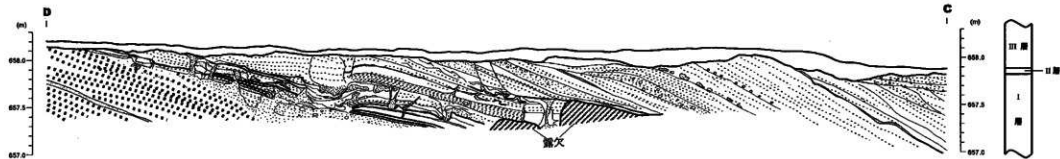
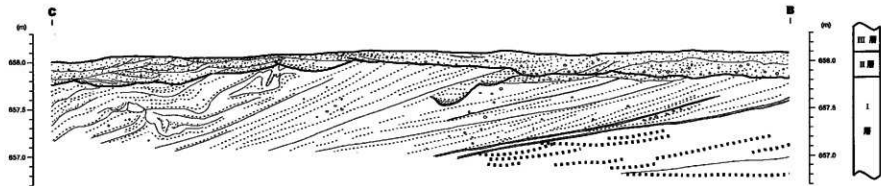
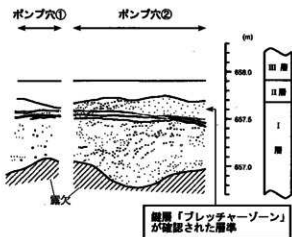
で傾斜しているため正確な層厚は不明であるが、トレンチ断面では層厚約10mが確認できた。II層はI層を不整合で覆い、厚さ30cm程度の細～中礫を含む砂礫層である。III層はその上位から地表まで約40～80cmの厚さでII層を不整合に覆う。III層はコンクリート片などを含み、盛り土や耕作土など近世に作られた人為層である。

調査地点は立が鼻遺跡に極めて近く、また遺跡で確認された地質構造より判断して、遺跡に分布している地層が調査地点まで連続して分布していると考えられる。野尻湖地質グループ(1984)によれば、調査地点には海端砂シルト部層の分布が予想され、本地点よりさらに南東約50m付近の伝九郎用水出口湖畔では、海端砂シルト部層の鍵層「三点セット」が露出するとされている。「三点セット」は灰色スコリア層と紫灰色細粒火

層序区分	総合柱状図	コア番号	層厚等	地質	地質区分	年代	
野尻湖層	砂美シルト部層	F4	1-7	細粒砂質シルト、中粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト	Ⅰ内層	1	
		F2	8-10	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト			Ⅱ
		F1	11-13	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト			
	立が鼻砂部層	T7	14-16	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト	Ⅰ	3.3	
		T6	17-19	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト			Ⅱ
		T5	20-22	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト	Ⅲ	3.9	
		T4	23-25	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト			Ⅰ
		T3	26-28	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト	Ⅱ	4.1	
		T2	29-31	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト			Ⅲ
		T1	32-34	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト	Ⅰ	4.3	
		砂海シルト部層	U3	35-37			粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト
U2	38-40		粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト				
U1	41-43		粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト				
シ貫ノ木シルト部層	E2	44-46	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト	Ⅰ	7		
	E1	47-49	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト				
登程島沖層	M2	50-52	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト	Ⅰ	8		
	M1	53-55	粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト、粗粒砂質シルト				
基盤			褐色泥岩				

図8 野尻湖層の層序(野尻湖地質グループ, 2004)

*事務局: 〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田4-9-17 1-202 内山 高 気付



I層(野尻湖層に対比される)に注目して堆積構造をスケッチしたものの、NNWからSSEへデルタが前進しながら堆積しているようすと、液状化や滑動による堆積相の乱れが観察される。図中のP5～P7は写真図版3-5～7に対応。重機掘削面から地表面までのIII層は省略した。

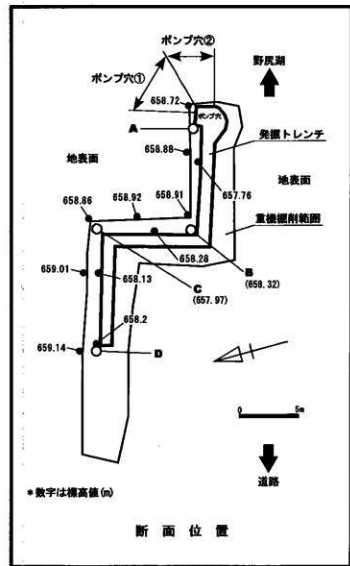


図9 野田屋ホテル跡地調査地の断面図

山灰層との互層からなる。地層を対比するにあたり、スケッチを取ったグリッド壁面には鍵層となる火山灰層は認められなかった。しかし、グリッド面に「三点セット」より上位の鍵層である斜長石の目立つ灰色安山岩からなる火山角礫層「ブレッチャーゾーン」がダンゴ状に分布しているのが確認されたことから、I層の層準は海端砂シルト部層U3中の「ブレッチャーゾーン」と、その下位の鍵層である海端砂シルト部層U1の「三点セット」との間に堆積した地層であると考えられる。したがって、I層は約4.3～5万年前に堆積したものと考えられる。

II・III層に関しては、時間軸となるマーカーが確認されなかったため、II層の層準およびIII層の下面の時代は不明である。

3. 調査地域の堆積環境

グリッド壁面において観察された地層の堆積構造(図9)を下位より述べる。

I層は走向がNNW-SSE方向、傾斜が湖側(NE方向)に向かって約20～30度で傾く構造が卓越している。細礫からシルトよりなるIセットの堆積相は多くのものが級化構造を示すが、なかに逆級化構造を示すものもたまに認められることから、何回もの洪水流によるものと推定される。また、このような堆積相が何セットも上位に積成していることから、調査地域の野尻湖層は、流水により陸域から運搬された堆積物が水域でWSWから湖側に向かってフォアセットを形成しながら前進してきたもので、デルタ堆積物であると解釈した(写真図版3-5)。その他、顕著な構造として、砂層の上位に堆積しているシルト層が乱れ、下位の砂層がシルト層を突き破って噴砂した構造が東西方向の断面で数多く認められる。特にA-B断面では、上流側において地層に亀裂とそれを境とした地層の不連続構造が認められ、下流側において砂層が滑落し、それに押されてシルト層がめくれあがって大きく乱れた変位構造が認められた(写真図版3-5・6)。これらのことから、水域の中に前進してきたデルタ堆積物が地震などで崩れ、一部では地すべり状に滑って乱れた状態で堆積し、また一部では液状化を起こしたと解釈できる(写真図版3-6)。I層の上部ではウェーブリップルが認められることから、これらの堆積物は波の影響を受ける程度の比較的小さい水辺で堆積したと考えられる(写真図版3-7)。

II層の堆積構造はB-C断面でよく観察できる。I層を溝状に削り込んだ断面が、側方へいくつも付加している堆積構造が観察され、東西方向に流れる流路が移り変わりながら堆積したと考えられる。

4. まとめ

調査地域におけるトレンチ調査により、以下のことがわかった。

- (1) 本地域に分布する地層は不整合により3層に区分できる。そのうち最下位のI層の層準は、野尻湖層海端砂シルト部層の鍵層「ブレッチャーゾーン」の存在により、海端砂シルト部層U1～U3の間であることが証明した。
- (2) I層はその堆積構造からデルタ堆積物であり、流水により陸域から比較的小さい水域へデルタが前進して形成されたものであると考えられる。
- (3) I層の堆積構造はシルトが乱れており、地震による液状化や滑動が発生したことが推定される。

付記

本稿は、野尻湖発掘調査団が行った2005年野尻湖広域地質調査の参加者全員で現地討論した結果を執筆者が取りまとめたものである。

文献

野尻湖地質グループ, 1984, 野尻湖層の層序—野尻湖発掘地とその周辺の地質—その3(1979—1983), 地団研 専報27, 1-21,

野尻湖地質グループ，2004，長野県北部野尻湖湖底発掘地周辺の地質—とくに野尻湖層の再定義について—，野尻湖博物館研究報告，7，1-13.

執筆者

野尻湖地質グループ（執筆責任者：内山美恵子）

スケッチ作成者：青木香央子・趙 哲済・川辺孝幸・小島 萌・小林和宏・大村さつき・内堀俊佑・内山美恵子

トレンチ調査参加者【広域地質調査1班】（アルファベット順，敬称略）

赤羽貞幸・青木香央子・趙 哲済・柿原仁志・川辺孝幸・小島 萌・小林和宏・小林雅弘・野村 哲・大村さつき・斎藤尚人・杉田正男・高塚茂子・内堀俊佑・内山美恵子・渡辺哲也



1 試験調査の様子



2 試験トレンチの遺物出土状況



3 本調査の様子



4 調査地全体の発掘状況



5 遺物出土状況①



6 遺物出土状況②

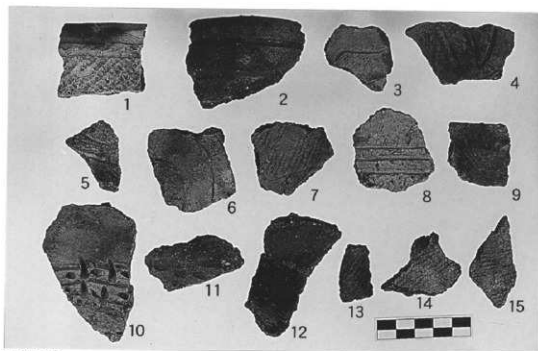


7 遺物出土状況③

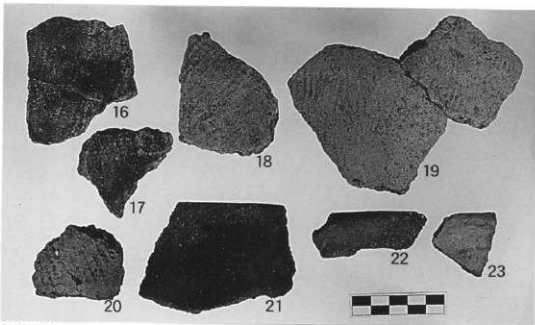


8 遺物出土状況④

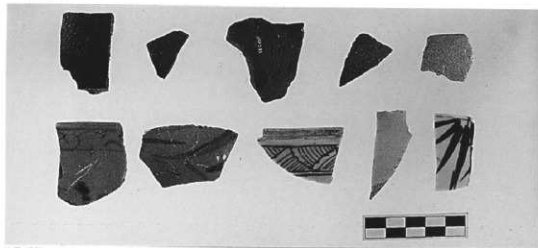
写真図版 2 狐久保遺跡の主な出土遺物



1 縄文土器①



2 縄文土器②



3 縄文土器



1 試掘調査の様子(遠景)



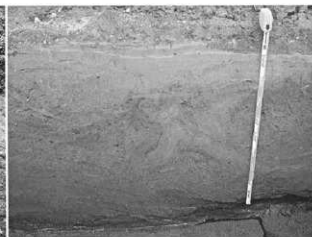
2 試掘調査の様子(近景)



3 壁面の記録の様子



4 壁面 (B-C) 遠景



1	2
3	4
5	6
7	

写真の配置と番号

写真説明

5. テルタのトップが滑動シラミナが不連続になっている。(撮影:川辺孝幸)

6. 滑落した砂により左側から押されてシルトがめくれ上がったように変形している。(撮影:小林雅弘)

7. 波の作用により形成される左右対称のリップルが連続している。(撮影:川辺孝幸)

報 告 書 抄 録

書 名	平成17年度町内遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	狐久保遺跡ほか							
シリーズ名	信濃町の埋蔵文化財							
シリーズ番号								
編 著 者 名	渡辺哲也、野尻湖地質グループ							
編 集 機 関	信濃町教育委員会							
所 在 地	〒389-1305 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL: 026-255-5923							
発 行 年 月 日	2006年(平成18年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
狐久保	長野県上水内郡信濃町 大字野尻字狐久保404-2	205834	42	36度 49分 23秒	138度 12分 15秒	20050426 ～ 20050511	24	個人住宅 建設
野田屋ホテル 跡地	長野県上水内郡信濃町 大字野尻字海端266-2、 277-6	205834		36度 49分 49秒	138度 12分 24秒	20050808 ～ 20050819	120	福祉施設 建設
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
狐久保	散布地	縄文時代 平安時代 中世・近世		土器 土師器 陶磁器など 178点		縄文時代晩期前半の上器が出土した。		
野田屋ホテル 跡地	散布地			出土品なし				

平成17年度町内遺跡発掘調査報告書

— 狐久保遺跡ほか —

発 行 平成18年(2006)3月31日
 発行者 信濃町教育委員会
 〒389-1305
 長野県上水内郡信濃町大字柏原428-2
 TEL. 026-255-5923
 印 刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037
 長野県長野市西和田1丁目30番地3号
 TEL. 026-243-2105

2 0 0 6

Shinano-machi Board of Education,
Kamiminochi-gun, Nagano, 389-1305 Japan.